

優秀賞

テーマ…誰かのために、わたしができること 「神様からの試練」

栃木県・宇都宮文星女子高等学校2年 櫛引潤菜

目が見えない世界。私には全く想像のつかない世界であり、多くの疑問だらけです。どこかで読んだ本には、「目に映る視界について盲目の人がどう感じているのか簡単に知りたいならば、自分の後ろの世界をどう感じているか考えればよく分かる」と記されていたことが今でも頭に残っています。私たちには背中に目がないので後ろの世界は見る事が出来ません。つまりそれは、意識されない世界Ⅱ「存在しない」というものになります。果たして本当にそうなのでしょいか。私たちが盲目の人々に出来ることを考えてみましょう。

高校一年生の時の秋、私はバスの中で一人盲目の男性に出会いました。そのバスはスロープ式ではなく階段式であったのでそれに気付いた私は男性に「何かお手伝い出来ることはありませんか？」と尋ねました。すると男性は「左手を掴んでくれますか？」と答え、私が左手を握ると「久し振りに素敵な人に出会えたよ」と微笑みながらゆっくりと階段を降りました。男性はバス停の近くのショッピングモールに用事があり、その通りは車の通行が多く、ショッピングモールへも初めて行くみたいだったのでついて行くことにしました。男性はショッピングモールにつくまでこんな話をしてくれました。

男性がある日電車に乗っていた時、女子高校生三人が男性の方を見て、何やらそこそ話をしていたそうです。電車の中で女子高校生と男性が近くなると女子高校生はこう言っていたそうです。「あの男の人障がい持っている人だよ。目と耳が不自由みたいだね。本当に生きてる意味あるのかな？」。男性はその言葉にすごくショックを受けました。まず、自分は目が不自由なのであって、耳は聞こえるし、その言葉も届いてしまっている。「一番傷付いたのは、「生きてる意味」を問われたこと。男性はその後、問われたことに対する答えを私に教えてくれ

ました。「生まれつきや生きてる中で、何かしらのハンディキャップを持っている人は、その人ならその壁を越えられる！」と神様からの試練を与えられた人なんだよ。その試練に耐えて向き合い、日々幸せな生活を送ることが僕の生きてる意味です。そしてあなたみたいな素敵な人に巡り合う幸せも僕がいないんだ」と私の手を強く握り真っ直ぐ目を見て「ありがとう。あなたにたくさん幸せが訪れますように」と言ってくれました。

私は目が見えます。男性は目が見えません。ですが男性は「盲目」というハンディキャップを持ちながらも誰よりも強く、真っ直ぐに生きています。私たちにはハンディキャップを持つ人々の役に立てることがたくさんあるのではないのでしょうか。人には「思いやりの心」があります。そんな人々に手を差しのべ、共に生き、協力していける能力を持っています。私たちがその人々の目になれば良いのです。私たちが助け合い、はげまし合って生きていくことで幸せがたくさん訪れるのではないかと私は強く思います。そして意識されていない世界は存在しないのか。盲目の人々はこの「見えない世界」を「存在しない世界」と納得できるのか。私は少し違うのではないかと思えます。目が見えない世界を知らない私が断言することは出来ないけれど、その見えない中にも「世界」は存在していると私は考えます。目の見えない世界の中で盲目の人々は一生懸命生き、その試練を乗り越えています。私たちもその人の力になりながら共に一生懸命真っ直ぐに生きていきたいです。